

ジェンダー研究センター彙報＜平成20年度＞

(平成20年4月1日～平成21年3月31日)

職名は発令時による

平成20（2008）年度研究プロジェクト概要

	年 月 日	テーマ	報告者、評者等
I G S セ ミ ナ ー	女性リーダー育成プログラム「アカデミックリーダーへの道（ロールモデル編）」		
	平成20年1月14日	第一回 「ユネスコとは何か？ その組織と活動」	講師：菅野琴（元ユネスコ本部職員／本学ジェンダー研究センター客員研究員）
	平成20年1月21日	第二回 「ユネスコと女性：ジェンダー主流化政策」	講師：菅野琴（元ユネスコ本部職員／本学ジェンダー研究センター客員研究員）
	平成20年1月28日	第三回 「『持続可能な開発のための教育』におけるジェンダー主流化—アジアの経験から」	司会：菅野琴（元ユネスコ本部職員／本学ジェンダー研究センター客員研究員） 報告：徳留丈士（文部科学省国際統括官付ユネスコ第二係長／国内ユネスコ委員会事務局）、林川真紀（ユネスコ・アジア太平洋地域教育局／バンコク事務所APPEAL ユニットプログラム専門家） ファシリテーター：臺丸谷美幸、長田 華子（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）
講 演 会	平成19年10月21日	なぜ先端医療をもとめるのか：生殖補助技術と倫理	講演者：柘植あづみ（明治学院大学教授・お茶の水女子大学客員教授）
	平成20年12月10日	国際公務員という仕事——ユネスコ本部職員の経験から——	講師：菅野琴（元ユネスコ本部職員／本学ジェンダー研究センター客員研究員）
	平成21年3月17日	「暴力とジェンダー：ジェームズ・ギリガン&キャロル・ギリガン講演会」	講師：ジェームズ・ギリガン（ニューヨーク大学 教授 精神医学）、キャロル・ギリガン（ニューヨーク大学教授 心理学）
コ ウ ム キ ユ	平成20年7月31日	「レイ・チョウ・コロキウム」	講演者：レイ・チョウ（ブラウン大学） 応答者：新田啓子（立教大学准教授）、山口菜穂子（お茶の水女子大学大学院博士後期課程） 司会：竹村和子（お茶の水女子大学教授）
資 本 ・ 自 然 ・ セ ク シ ュ エ リ テ ィ と ジ ェ ン ダ ー 研 究 会	平成20年6月8日	研究会「グローバル資本主義とジェンダー」	講師：田崎英明（立教大学教授）、佐藤隆（大分大学准教授）
	平成20年6月28日	講演会「グローバルな源流と身体」	講師：Massimo de Angelis（University of East London） コメンテーター：田崎英明（立教大学教授） 司会：足立眞理子（お茶の水女子大学ジェンダー研究センター長）

1. 人事関係

1) 運営委員会名簿（括弧内は在任期間）

ジェンダー研究センター長・人間文化創成科学研究科准教授	足立眞理子	（平成19年4月1日～）
ジェンダー研究センター員・人間文化創成科学研究科教授	舘 かおる	（平成8年5月11日～）
ジェンダー研究センター員・人間文化創成科学研究科准教授	申 琪榮	（平成20年4月1日～）
ジェンダー研究センター員・人間文化創成科学研究科准教授	石井クンツ昌子	（平成20年4月1日～）
ジェンダー研究センター員・人間文化創成科学研究科教授	戒能 民江	（平成16年4月1日～）
人間文化創成科学研究科教授	杉田 孝夫	（平成16年4月1日～）
人間文化創成科学研究科教授	真島 秀行	（平成16年4月1日～）
人間文化創成科学研究科教授	宮尾 正樹	（平成19年4月1日～）
人間文化創成科学研究科教授	米田 俊彦	（平成16年4月1日～）

ジェームズ・ウェルカー

（イリノイ大学アルバナシャンペイン校東アジア言語文化学科博士候補生）
（同上）大海 篤子
（武蔵大学非常勤講師）（同上）菅野 摂子
（立教大学非常勤講師）（同上）小林富久子
（早稲田大学教育学部・ジェンダー研究所所長）（同上）斉藤 正美
（富山大学非常勤講師）（同上）酒井 順子
（フェリス学院大学非常勤講師）（同上）佐藤（佐久間）りか
（元本学COE「ジェンダー研究のフロンティア」研究協力者）（同上）新ヶ江章友
（名古屋市立大学大学院客員講師）（同上）仙波由加里
（桜美林大学総合研究所）（同上）高橋さきの
（東京農工大学非常勤講師）（同上）田中 俊之
（学習院大学PD研究員）（同上）中山まき子
（同志社女子大学教授）（同上）根村 直美
（日本大学経済学部教授）（同上）林ニコル奈津子
（ミシガン大学ジェンダー研究所客員研究員）（同上）村松 安子
（東京女子大学名誉教授）（同上）山崎 美和恵
（埼玉大学名誉教授）（同上）林 紅
（中国アモイ大学人文学院助教授）（同上）

2) スタッフ名簿（括弧内は在任期間）

センター長（併）	足立眞理子	（平成19年4月1日～）
センター教員	舘 かおる	（平成12年4月1日～）
	申 琪榮	（平成20年4月1日～）
客員教授（国内）	柘植あづみ （明治学院大学社会学部教授） （平成20年4月1日～ 平成21年3月31日）	
	小川眞里子 （三重大学人文学部教授）	（同上）
	伊藤 るり （一橋大学大学院教授）	（同上）
研究員	山崎 明子 （日本学術振興会RPD特別研究員） （平成19年4月1日～ 平成19年3月31日）	
研究協力員	朝倉 京子 （新潟県立看護大学助教授） （平成20年4月1日～ 平成21年3月31日）	
	磯山久美子 （法政大学非常勤講師）	（同上）

研究機関研究員

研究支援推進員

事務局員

山出 裕子（平成20年4月1日～
平成21年3月31日）

飯田 伸彦（平成18年4月1日～）

花岡ナホミ（平成18年4月1日～）

2. 会議関係

＜運営委員会の開催＞

平成20年 4月17日／6月10日／平成21年 2月4日

3. 研究調査活動

1) センター共同研究プロジェクト

「教育におけるジェンダー平等：EFA中期評価をジェンダーの視点で探る」

【研究担当】

菅野 琴（IGS客員研究員、元ユネスコ本部職員・駐ネパール カトマンズ事務所長）

館 かおる（本学教授）

【研究内容】

12月10日、1月14、21、28日にお茶の水女子大学ジェンダー研究センターと大学院共同セミナー「リーダー育成プログラム」の一環として公開講演会「国際公務員という仕事—ユネスコ本部職員の経験から—」と3回の連続講座「ユネスコとは何か？その組織と事業活動」、「ユネスコと女性：ユネスコのジェンダー主流化政策とその活動」と「持続可能な開発のための教育におけるジェンダー主流化—アジアの経験から」を受け持った。また、EFA中期評価のジェンダー評価研究に関してはネパール、パキスタン、ブータン等の国別報告書の比較考察の結果を12月16-19日の大阪大学集中講義に一部、加えた。それら国の現段階での課題、教育におけるジェンダー平等についての無理解や関心の低さやジェンダー主流化への挑戦を課題として注目した。さらに、ネパールの女子奨学金制度に関する論文を国立女性教育会館研究ジャーナル13巻（2009年3月）に発表、6月7日の国際開発学会第9回春季大会では「EFA第5目標、教育におけるジェンダー平等への課題」を報告した。

「フェミニスト経済学の理論、方法、課題」

＜科学研究費基盤研究B＞

【研究担当】

足立真理子（本学准教授）

本山 央子（アジア女性資料センター運営委員）

【研究内容】

本研究の要旨は、90年代初めに国際的に成立した、フェミニスト経済学についての包括的な研究をおこない、経済学の新たな一分野としてのフェミニスト経済学の特徴を明らかにするとともに、そこから、従来の経済学においては、しばしば問題の所在そのものが不可視化され、それゆえに経済問題

として扱われてこなかった一連の問題群への接近と現実的対応可能性を見出すことにある。フェミニスト経済学は、フェミニズムの社会的要請を背景として誕生し、ジェンダーに関わる問題群を経済学の学問的領域において検証することを目的とする、経済学の新分野の一つである。フェミニスト経済学の国際的研究活動の中心は、1993年に設立された国際フェミニスト経済学会（International Association For Feminist Economics: IAFPE）であり、現在、ジェンダーと経済に関わる最も包括的な研究をおこなうとともに、国連をはじめとする国際機関および各国政府にたいして研究成果の提示を行っている。本研究は、経済学の新分野として成立したフェミニスト経済学を、三つの領域に分けて分析し、フェミニスト経済学の理論的特質と現状分析の課題を明確にしたうえで、市場中心主義的な合理的経済人によってのみ構成されるのではない、あらたな経済社会の代替理論の展開を構想する。

「アジアにおける再生産領域のグローバル化とジェンダー配置」

＜科学研究費基盤研究A＞

【研究担当】

伊藤 るり（IGS客員教授、一橋大学大学院教授）

足立真理子（本学准教授）

落合 絵美（本学大学院博士後期課程）

大橋 史恵（本学大学院博士後期課程）

越智 方美（本学大学院博士後期課程）

イシカワ・エウニセ・アケミ（静岡文化芸術大学准教授）

稲葉奈々子（茨城大学准教授）

大石 奈々（国際基督教大学准教授）

小ヶ谷千穂（横浜国立大学准教授）

定松 文（恵泉女学園大学准教授）

安里 和晃（龍谷大学非常勤講師）

このほか、「国際移動とジェンダー（IMAGE）」研究会メンバー

【研究内容】

1980年代後半以降、アジアでは家事、育児、介護、看護等の再生産領域で海外就労する女性労働者の急増が見られる。途上国女性が担う再生産労働はいまや「国際商品」と化し、少子高齢化、女性の就業形態の多様化、サービス経済化に直面する先進工業国で、福祉体制や景気動向を問わず、受容される傾向にある。また途上国でも、海外雇用市場を確保するための方策が戦略的に追求されている。他方、その裏では、海外就労女性の家族に再生産労働の空白が生まれ、そのこと

が家族や世代間関係に大きな負荷を与えている。再生産領域のグローバル化は、再生産労働の「国際商品」化に留まらず、このような労働と身体の再生産に食い込む《再生産連鎖》の広がりとして認識できる。本研究では、アジアにおける再生産領域のグローバル化の実態とその各国におけるジェンダー（再）配置との関連を、社会学、経済学、文化人類学、人口研究等の立場から学際的に把握することを目的とした。

なお、本プロジェクトは2005年度から2008年度の科学研究費補助金基盤研究（A）「アジアにおける再生産領域のグローバル化とジェンダー配置」（研究代表者 伊藤るり）の助成を受けた。

「家族とジェンダー——家庭内性別役割分業の日米比較研究——」

【研究担当】

石井クンツ昌子（IGS学内研究員、本学人間文化創成科学研究科教授）

賀茂 美則（ルイジアナ州立大学社会学部准教授）

Ross Parke（カリフォルニア大学リバーサイド校心理学部教授、家族研究センター所長）

ユン・ジンヒ（本学ジェンダー学際研究専攻）

加藤 邦子（本学ジェンダー学際研究専攻）

岩下 好美（本学ジェンダー社会科学専攻）

【研究内容】

日本では「男は仕事、女は家庭」という考え方が根強く存在し、家事や育児は女性が担っている場合が多い。しかし女性の高学歴化や就労率増加に伴い、女性の仕事と家庭の両立（ワーク・ライフ・バランス）が重要視されてきている。また少子化対策として男性の育児や子育て参加も啓発され、男性にとっても仕事と家庭の両立は重要な課題となってきた。従来の家庭内性別役割分業の研究では主に夫婦の相対的資源差、時間的余裕、性別役割分担観などの家庭内あるいは個人的な要因に焦点をあてたものが多かった。しかし、共働き家庭の役割分業に関しては家庭内要因に加えて就労環境や政策などの要因も理解することが重要である。本プロジェクトでは日米における共働き家庭の男女に焦点をあてて、仕事と家庭の両立に関する家庭・職場環境、政策などの要因を総合的に実証研究することを主な目的とする。

「ウェブ世界におけるジェンダーの位相」

【研究担当】

館 かおる（本学教授）

小山 直子（IGS客員研究員）

【研究内容】

本プロジェクトは、情報テクノロジーがもたらす「ジェンダー」にかかわる諸現象の解明を目的にするものであるが、特にウェブ世界におけるジェンダーの位相の様々な形態を研究対象に置く。具体的には「検索画面」を取り上げ、そこで提示される「ジェンダー」関連情報を分析し、検索順位の形成が、人為的操作を介入させない数値的アルゴリズムによって導きだされる「公平」なものという「神話」を、「検索順位」の決定要因を検証することにより、明らかにする。こうした研究は、情報テクノロジーの進展に伴い、ウェブ世界での「ジェンダー」にかかわる「情報の摂取」や「知の獲得」が、実世界の権力により作為的に作用する事態をテクノロジーの社会的形成の観点から考察することの価値を提示するものである。なお、本研究は、2007－2009年度の科学研究費補助金（B）「社会科学の新しい研究方法論としての統合型ウェブマイニング環境の開発研究」（研究代表者 増永良文）の一部を分担している。

「『医療機器の開発・応用とジェンダー』に関する研究」

【研究担当】

柘植あづみ（本学客員教授・明治学院大学教授）

小門 穂（IGS研究協力員）

三村 恭子（本学大学院博士後期課程）

【研究内容】

医学・医療が患者・利用者の身体を客体化していると指摘されて久しい。特に、医学・医療におけるジェンダーバイアスが、医療機器の開発に際しても女性の身体を客体化するように作用するという批判的指摘がある。もちろん、同じ機器・道具であっても、それを使う人の姿勢や熟練、そして患者・利用者の状態（心身ともに）によって、満足感・不快感、痛みの程度は異なるが、それでも機器・道具の開発デザインの際の視点は重要な要因だと考えられる。そこで、これらの機器がいかに開発・デザインされてきたのか、患者・利用者の声はいかに導入されているのかを調べていきたい。もし、開発の際に「女性向け」を意識したデザインがなされているなら、それはいかに表されているのか、なにをもって「女性向け」とされているのかなどを把握したいと考える。これらの機器と女性との関係の研究は、その一方に「女性の自己決定」として選ばれているとされる医療と女性との関係性について考察する資料をももたらすと考えられる。

「アジアにおける女性運動の理論的検討」

【研究担当】

戒能 民江（本学教授）

申 瑛榮（IGS准教授）

【研究内容】

2008年度はこれまでの研究成果を比較女性運動の観点から論文としてまとめ、その成果を発表した。その際、日韓の家族法改正運動の事例を、他の女性運動分野にも拡大して応用できる理論的枠組みを探った。

(3) 個人研究プロジェクト

「家族法とジェンダー化される市民権」

【研究担当】

申 瑛榮（IGS准教授）

【研究内容】

本研究は日本の家族法と国籍法をめぐる最近の判決や議論を通じて日本の（女性）市民権はいかに国家の法律によって、「家族」と結びつけられ、ジェンダー化されているのかを明らかにするものである。特に本研究では、国家の再生産＝家族の再生産という関係での女性や子供の市民権の制限について、（日本人）男性の「家父長」としての権限と他の家族との関係を定める国家の法律で正当化されてきた視点から、それを現在問題となっている具体的な家族法及び国籍法の例をあげて証明していきたい。

「ジェンダー視点に立った予算分析の実践——業績評価からアプローチ——」

【研究担当】

市井 礼奈（IGS客員研究員、南オーストラリア大学ワークライフバランス研究所研究員）

【研究内容】

本研究はジェンダー視点に立った業績指標作成をめざし、諸外国における事例を検討した上で、日本政府のワークライフバランス政策の中の両立支援予算に着目し、ジェンダー視点に立った予算分析ならびに業績評価指標を開発するものである。平成20年度は日本におけるGBAの実践準備段階として、海外におけるジェンダー視点に立った業績指標に関するレビューを行った。①ジェンダー視点に立った業績指標の作成を実施している諸外国の事例に関する文献収集および資料解説を行い、業績指標開発の経緯、作成法、実践的活用事例を検証した。②GBAと業績予算制度の先駆的取組をしているオーストラリア、ジェンダー視点に立った業績指標作成に

意欲的に取り組んでいる韓国において海外調査を行い、分析手法の確立に至るまでの経緯や分析過程で生じた問題点などに関する聞き取り調査を行った。特に韓国では、2010年から国会へジェンダー視点に立った予算（性認知予・決算）報告書を提出することが法律で規定され、平成19年度にジェンダー視点に立った業績指標開発が進められていたので、平成20年度に同国を訪問し、担当者への聞き取り調査を実施するのは有意義であった。

「戦後日本における『美術』と『家庭科』の教科編成——『手芸』再定位のポリティクス——」

【研究担当】

山崎 明子（日本学術振興会RPD特別研究員）

【研究内容】

本研究は、日本近現代における女性の表現活動を規定する社会システムを明らかにしようとする一連の研究の中に位置づけられるものであり、前年度に引き続き、学校教育における表現活動の位置づけをジェンダー理論の視点から再検討することを目的とした。特に昨年度は、戦後における教科としての「美術」の成立と女子用図画教育の消失という問題を考えるとともに、男女共学化により女子に特化された造形活動の家庭科への集約という問題を検討した。また、戦前から戦後にかけての男女共学化に伴う制度及び言説に関する基礎調査を行いながら、戦後の女性による造形活動をめぐる問題を理論化することを目指した。一昨年度の研究成果と併せて美術と家庭科をめぐるジェンダー・ポリティクスの総括を行った。

「工学教育とジェンダー」

【研究担当】

高橋さきの（東京農工大学非常勤講師）

【内 容】

本年度は、近代製糸産業の立ち上げにおける技術移転（横田英の『富岡日記』等）、労働状況（石原修『女工と結核』、細井和喜蔵『女工哀史』、高井としを『私の女工哀史』他）、工業化を背景とした性差観の成立（石原修『新稿労働衛生』、暉峻義等、桐原葆見等の労働科学研究所の仕事）、工場法の制定経緯や条文（特に女性労働に特化した保護・排除をめぐって）、工業化を背景とした家族観の変化（GMのPR映画、チャーリー・チャップリンの『モダンタイムス』他）などの題材について主に検討した。二年目となる昨年度は、こうした題材を深化させ、相互に関連づける作業を行った。こうし

た題材の利用により、学生が各自の専攻内容と密接に関わる存在としてジェンダーの社会関係を把握することが可能となり、また、ジェンダーの社会関係が介在することで、科学技術を取りまく社会関係の存在を臨場感をもって理解することが可能になるとの確信を深めた。研究成果の一部は、共生社会システム学会 2008年度大会「知の状況性をいかに認識させるか——繊維機械を授業に利用する」で発表した。

「スペインにおける男女共同参画政策について」

【研究担当】

磯山久美子（法政大学非常勤講師）

【研究内容】

本研究は、スペインにおいて、2004年のサパテロ政権発足以降、急速に進められてきた男女共同参画政策が、近現代史におけるスペインのジェンダーの問題からみた場合、どのように位置づけられ、あるいは成果としてとらえられるかを、教育、労働、婚姻の高齢化と少子化問題など、女性の変化を通して検討しようとした。

研究の成果は、碇順治編『ヨーロッパ読本 スペイン』河出書房新社、2008年、6月刊行の第六章「新しいパートナーシップを求めて」の執筆にまとめ、現代のスペインにおけるジェンダーの問題および、男女共同参画政策の現時点における有効性と問題を指摘した。

「女性と選挙に関する研究」

【研究担当】

大海 篤子（武蔵大非常勤講師）

【研究内容】

日本では女性と政治のかかわりについての研究はまだ少なく、本研究プロジェクトでは、これまでの女性の選挙に関する資料をまとめている。また、選挙の執行後、できるだけ早く、情報と分析を英文にて公開できるようにした。本年度は、2007年4月に執行された統一地方選挙における女性の進出の分析を行った。過去、数年各地の女性センターなどで、女性の政治参画の実践講座を行ってきたが、その実績をまとめて、発表し、2009年から始まる裁判員制度に関して、司法への国民の参画という文脈で、制度の周知、問題点などについて、これまで行ってきた政治参画に関する講演等に必ず付け加えていった。女性政策として、高齢者問題を取り上げ、地域における実践活動のプレ調査を2008年度中に行った。

「在英日本人コミュニティの歴史」

【研究担当】

酒井 順子（フェリス女学院大学非常勤講師）

【研究内容】

平成20年度は、戦中戦後の日本人社会における日本人コミュニティの調査をおこなった。戦中の在英日本人捕虜収容所であるマン島を訪問し、記録を調査した。また、戦後長らく商社員としてイギリスに駐在した男性2人に会い、戦後の日本人コミュニティの発展についてインタビューをした。

成果としては、日系コミュニティで働いていたイギリス人労働者階級出身者の口述文化についての論文を執筆した。

「身体／セクシュアリティとジェンダー」

【研究担当】

斉藤 正美（富山大学非常勤講師）

【研究内容】

今年度は、これまでの女性運動と身体性およびセクシュアリティについての研究を踏まえて、NWECA夏の交流フォーラムで、セクシュアル・マイノリティとコミュニケーションの関わりを考察するワークショップを企画、参加した。そこでは、個人を特定の「人格」や「要素」に還元する「パッケージ化」の欲望と、「パッケージ化」を逃れようとする欲望との葛藤に焦点をあてつつ、クイアなコミュニケーション空間の可能性について議論し、その議論を動画発信することができた。その他、International Gender and Language Association, Association for Asian Studiesでの口頭発表ならびに日本語用論学会における口頭発表で「ジェンダー」概念と言語イデオロギーについて、「ジェンダー」「男女共同参画」政策についての研究成果を報告することができた。貧困と女性身体に関わりについては「女一揆としての富山・米騒動」をまとめることができた。このような成果をあげるに当たり、お茶の水女子大学IGS研究協力員として支援を受けられたことに感謝したい。

「日本における『男性同性愛者』の男性性とHIV/AIDSの関係をめぐる研究」

【研究担当】

新ヶ江章友（IGS研究協力員、名古屋市立大学大学院客員講師）

【研究内容】

近年のHIV/AIDS研究においては、異性間性交渉時のジェンダー関係の不均衡とHIV/AIDS感染リスクとの関係をめぐる研究は行われてきたが、男性同性間性交渉におけるジェンダー問題は不問にされることが多かった。ゆえに、本研究で

は、MSM (Men who have Sex with Men) 間の性的実践に着目し、そこから男性ジェンダーを見ることを通して、セクシュアリティ研究とジェンダー研究の接点を模索し、その成果「名古屋市で開催されたMSMを対象としたHIV検査会受検者質問紙調査」は、名古屋市立大学、市川誠教授の研究プロジェクト報告書『男性動性間のHIV感染対策とその介入効果に関する研究』に掲載された。

「第三者の介入する生殖補助医療が社会へもたらす影響」

【研究担当】

仙波由加里 (桜美林大学総合研究所)

【研究内容】

お茶の水女子大のIGSの研究協力員という立場を得られたことで、2008年度も多くの人とコンタクトを取りながら、第三者の介入する生殖補助医療 (以下DC [Donor Conception の略] と書く) に関する情報を積極的に収集することができた。

その中でも特に有意義だったのは、以前から興味を持っていた代理母問題の情報をかなり集められたことである。米国カリフォルニアでは、実際に代理懐胎中の女性に会うことができ、いろいろな話を聞くことができた。また、11月にはサンフランシスコで開催された米国生殖医療学会 (ASRM) にも足を運び、提供卵子や提供精子の仲介業者、出生前養子のコーディネータ機関の人や、DCに関連する医療における保険を扱う保険会社の担当者などから、資料を提供してもらい、業務の内容等についても聞くことができた。そしてアメリカにおけるDCビジネスの現実を目の当たりにした。10月には、北海道大学で開催された日本医学哲学・倫理学会の年次大会で、「代理懐胎、配偶子・胚提供の金銭授受に関する問題」という題目で報告も行なった。9月には、『生命倫理』(日本生命倫理学会) Vol.18 (1) に、投稿していた論文「代理懐胎合法化の是非についての検討—日本と米国カリフォルニア州の代理懐胎の現状から—」(pp.118-125) が掲載された。

「ジェンダー予算分析の試み——地方政府の子育て支援予算を手がかりとして——」

【研究担当】

村松 安子 (東京女子大学名誉教授)

【研究内容】

2007年2月に着任した北九州市新市長は、子育てや教育など社会福祉関連政策の充実を目指して、2006年10月、55項目

の政策大綱を公表し、着任後、マニフェスト「すぐに着手実行するハートフル事業」を公表した。国政は兩立支援や少子化対策を重視する中で、子育て支援がマニフェストのトップにリストアップされたことは注目に値する。全体の歳入が減少する中で、包括的な子育て支援予算は増額されており、予算の配分についての市民からの要望、その採否も公表され、確かに、予算過程への市民参加 (民主化) は進んだと評価できる。しかし実際の予算編成・執行は伝統的な部局別で行われており、子育て支援事業のような部局横断の事業にあっては、特定部局の予算全体の中から当該事業にかかわる予算を予算項目ごとに洗い出すことは部外者には困難である。特にプログラムが新設部局で管掌される場合は、前年度からの予算の変化の追跡など極めて難しい。いずれにしても、予算の編成方法の改善や予算過程の情報公開、男女別統計の整備・充実など、ジェンダー予算のための環境整備が必要である。

「中国におけるジェンダー研究ネットワークの特色について——『Network of Women/Gender Studies』を中心に——」

【研究担当】

林 紅 (中国アモイ大学人文学院助教授)

【内 容】

2006年5月に運営し始めた全中国ジェンダー研究ネットワーク「Network of Women/Gender Studies」(www.chinagender.org) は、この2年の間に、中国における女性学・ジェンダー論関連科目の現状、授業の手法・教材、科目実施の課題、女性学・ジェンダー論に関する事業や活動への関わりなどについての情報交換、また女性学・ジェンダー論関連科目の開設と教員養成に関する大きな役割を担った。本研究の課題は、平成19年度の研究課題に続き、このネットワークの組織構造と運営体制などの特徴および役割を、具体的に明らかにすることであった。その後は、さらに国際的な比較研究を行ってみたい。

「女 (性) の変貌——昭和後期のトランスナショナルに関わった女たち——」<米国フルブライト研究助成>

【研究担当】

ジェームス・ウェルカー (イリノイ大学アルバナシャンパイ
ン東アジア言語文化学科博士候補生)

【研究内容】

この研究では本年度 (平成21年度) もひきつづき、研究が継続されているが、社会的に重要視されていなかった成人および思春期の<女>のコミュニティ、および彼女たちの、西

洋の思想とイメージを利用して女というカテゴリーを再考しようという試みについて考察している。特に昭和後期にジェンダーとセクシュアリティに対する社会規範に挑戦した三つのコミュニティ——ウーマン・リブ活動家、レスビアン・コミュニティ、少女漫画のサブジャンルの作者および読者——に焦点が当てられている。これまでの研究により、これらのコミュニティは規範的な社会役割に対する抵抗、その道具としての西洋の思想・イメージの利用という点において共通項を持っており、実際、複数のコミュニティに属しているメンバーも存在したことが明らかになっている。なお、本研究の中間報告は2009年1月に開かれた「IGS研究委員会2008」で報告されている。

「北・南米の日系女性文化に見られるジェンダーと表象性の比較研究」＜科学研究費補助金若手（B）研究＞

【研究担当】

山出 裕子（IGS研究機関研究員）

【研究内容】

本研究は、北米（カナダ、アメリカ）と南米（特にブラジル）の日系女性文化に見られる特徴を、ジェンダーと表象性に注目して比較分析するものである。平成20年度は、8月にカナダにて在外研究を行い、英系カナダの日系作家ケリー・サカモトと仏系カナダ（ケベック）の日系作家アキ・シマザキの作品に関する分析を行いその成果である研究論文は、『カナダ文学研究』（2009年）に掲載されている。また、日系ブラジル文化についての研究を、2009年2月にサンパウロにて行った。昨年度の日系ブラジル文化についての研究成果は、2009年1月に開催された「IGS研究委員会2008」で報告され、また、「ジェンダー研究」第12号（2009）に、研究報告として掲載されている。

4. 研究交流・社会連携部門

平成20年4月より平成21年3月の間の活動は次の通りである。

1) 研究委員会

平成21年1月29日（木）17時～

日本ブラジル交流年記念として、研究機関研究員の山出裕子が「日系ブラジルの表象文化と女性の役割——＜ニッケイ＞と＜デカセギ＞」、上智大学グローバルスタディーズ研究科特別研究員の渡会環が「グローバル化時代のブラジル日系人と日本文化——日本YOSAKOIソーランを踊る若い世代の取り組みを事例に——」の報告をおこなった。さらに、IGS客員研究員／南オーストラリア大学ワークライフバランス研究

所研究員の市井礼奈が「ジェンダー平等の実現に向けたジェンダー予算の新たな可能性——世界的動向と新たな取組」、IGS研究協力員／イリノイ大学大学院のジェームス・ウェルカーが「女性の領域を書き直す——キーワードの語源についての一考察——」と題した報告をおこなった。

2) IGSセミナー、講演会、ワークショップ

① 6月8日『グローバル資本主義とジェンダー』

「資本・移動・セクシュアリティとジェンダー研究会」主催、ジェンダー研究センター協賛、講師：田崎英明（立教大学）、佐藤隆（大分大学）

② 6月28日『グローバル化する源流と身体』

「資本・移動・セクシュアリティとジェンダー研究会」主催、ジェンダー研究センター協賛、講演者：Massimo de Angelis（University of East London）、コメンテーター：田崎英明（立教大学）、司会：足立眞理子（ジェンダー研究センター）

③ 7月31日『レイ・チョウ コロキウム』“Sentimentalism in Contemporary Chinese Cinema and Beyond”

ジェンダー研究センター、「暴力と主体構築」科研プロジェクト共催、講演者：レイ・チョウ（ブラウン大学）、応答者：新田啓子（立教大学）、山口菜穂子（お茶の水女子大学博士課程）、司会：竹村和子（お茶の水女子大学）

④ 10月21日『なぜ先端医療をもとめるのか——生殖補助技術と倫理——』

ジェンダー研究センター主催、大学院人間文化創成科学研究科博士後期課程「ジェンダー科学技術論」履修科目、講演者：柘植あづみ（明治学院大学教授・お茶の水女子大学客員教授）

⑤ 12月10日＜公開講演会＞『国際公務員という仕事——ユネスコ本部職員の経験から——』

ジェンダー研究センター提供科目、ジェンダー社会科学専攻「国際社会ジェンダー論」、女性リーダー育成プログラム（実践編）履修科目、講師：菅野琴（元ユネスコ本部職員／本学ジェンダー研究センター客員研究員）

⑥ 1月14日、1月21日、1月28日『女性リーダー育成プログラム「アカデミックリーダーへの道（ロールモデル編）」／ジェンダー社会科学専攻「国際社会ジェンダー論」連続講座』（全3回）

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター提供科目、ジェンダー社会科学専攻「国際社会ジェンダー論」、女性リーダー育成プログラム（実践編）履修科目、講師：菅野琴

(元ユネスコ本部職員／本学ジェンダー研究センター客員
研究員)

- ⑦ 3月17日『暴力とジェンダー：ジェームズ・ギリガン＆
キャロル・ギリガン講演会』

お茶の水女子大学グローバルCOEプログラム「格差セン
シティブな人間発達科学の創成」／お茶の水女子大学ジェ
ンダー研究センター共催」

3) 関連研究会

- ①「映像表現とジェンダー」研究会

＜コーディネーター＞館かおる（IGS教授）、小林富久子
（IGS研究協力員・早稲田大学教授）

＜事務局＞磯山久美子（立教大学他非常勤講師）、臺丸谷
美幸（本学博士後期課程）、前田有貴（本学博士前期課程）

- ②「資本・移動・セクシュアリティとジェンダー研究会」

＜コーディネーター＞足立真理子（IGS准教授、田崎英明
（立教大学教授）、伊田久美子（大阪府立大学教授）

- ③「身体／セクシュアリティとジェンダー研究会」

＜コーディネーター＞根村直美（IGS研究協力員、日本大
学教授）、館かおる（IGS教授）

＜事務局＞佐久間りか（IGS研究協力員）

＜メンバー＞朝倉京子（IGS研究協力員、新潟県立看護大
学看護学部准教授）、菅野摂子（IGS研究協力員、立教大
学非常勤講師）、田中俊之（IGS研究協力員、学習院大学
PD研究員）、兵藤智佳（早稲田大学平山郁夫記念ボラン
ティアセンター・客員講師）、東優子（大阪府立大学准教
授）

4) 関連プロジェクト

- ①文部科学省委託事業：近未来の課題解決を目指した実証的
社会科学研究推進事業「ジェンダー・格差センシティブな
働き方と生活の調和：キャリア形成と家庭・地域・社会活
動が可能な働き方の設計」（平成20年度～平成24年度）

＜研究分担者＞永瀬伸子（人間文化創成科学研究科教授）、
石井クンツ昌子（ジェンダー研究センター員／人間文化創
成科学研究科教授）、戒能民江（ジェンダー研究センター
員／人間文化創成科学研究科教授）、申琪榮（ジェンダー
研究センター員／人間文化創成科学研究科准教授）、菅原
ますみ（人間文化創成科学研究科教授）、館かおる（ジェ
ンダー研究センター員／人間文化創成科学研究科教授）

6. 教育・研修部門

①研究員

山崎 明子（日本学術振興会特別研究員RPD）

②学部出講・大学院担当

＜人間文化創成科学研究科博士前期課程ジェンダー社会科学
専攻＞

足立真理子

ジェンダー社会経済学（後期）

ジェンダー社会経済学演習（後期）

開発・ジェンダー論特論（後期オムニバス）

館 かおる

ジェンダー基礎論（前期）

ジェンダー基礎論演習（後期）

開発・ジェンダー論特論（後期オムニバス）

申 琪榮

比較ジェンダー開発論（前期）

比較ジェンダー開発論演習（後期）

開発・ジェンダー論特論（後期オムニバス）

＜人間文化創成科学研究科博士後期課程ジェンダー社会科学
専攻＞

足立真理子

ジェンダー政治経済学演習（通年）

ジェンダー学際研究論文指導（通年）

館 かおる

ジェンダー史論演習（通年）

ジェンダー学際研究論文指導（通年）

申 琪榮

家族政策論（後期）

＜学部＞

足立真理子

グローバル化文化学総論Ⅱ（後期）

館 かおる

生活科学部 「ジェンダー論」（前期）

申 琪榮

生活科学部「比較ジェンダー論」(後期)

グローバル文化学「国際ジェンダー論」(後期)

7. 社会貢献

ジェンダー研究センター

・諸外国/国内の女性関係行政部門、民間団体(NGOの女性問題担当者等)、研究者等の視察受け入れ、日本の男女共同参画等の現状について解説など

足立真理子

〈他大学出講〉

・早稲田大学法学部非常勤講師「歴史・思想研究入門」「ジェンダー論Ⅰ」(平成20年4月1日～平成21年3月31日)

〈その他〉

・日本フェミニスト経済学会代表など

館 かおる

〈その他〉

・高知女子大学・(財)こうち男女共同参画社会づくり財団平成20年度男女共同参画を考えるセミナー「『産み育てる社会』と『看取り得る社会』の形成のために」講師、平成20年11月1日など

8. 文献・資料収集/情報提供/閲覧活動

1) 主要収集資料

湯浅年子博士、飯島愛子氏、加藤シヅエ氏の資料整理

【担当】館かおる(IGS教授)、山崎美和恵(埼玉大学名誉教授)、小山直子(IGS客員研究員)、山出裕子(IGS研究機関研究員)高木綾、佐藤梢

2) 資料提供

■国立科学博物館「日本の科学者技術者展シリーズ第5回 までこたちの挑戦——日本の女性科学者技術者——」へ、湯浅年子、辻村みちよ、黒田チカ、保井コノ等関係の資料提供

■国立科学博物館「日本の科学者・技術者の肖像展示」へ、保井コノ、黒田チカ、湯浅年子関係の資料提供

■湯浅年子メモリアル(フランス)へ、湯浅年子関係の資料提供

■東京女子高等師範学校関係の資料

■その他、ジェンダー研究センター刊行物等

3) リファレンスサービス資料及び情報の提供・閲覧・貸出・常設展示

■コピーサービス: 常時附属図書館情報サービス・情報システム係で担当

■ホームページ(和文・英文)の更新実施

■図書以外に関する情報提供

4) 図書・資料寄贈(敬称略)

掲載は、和書: 寄贈者名『書名』(著者名)、洋書: 寄贈者名 書名(イタリック)(著者名)の順とした。

〈和書〉: 伊藤るり『高齢社会のジェンダー配置と移住ケア労働者: 日本とシンガポールの比較研究』(伊藤るり, 村上一基編集)、中村麻友『郊外地域の変容と再生産: 東京都八王子市の幼稚園を中心に』(中村麻友)、金秀炫『アジア通貨危機以降の韓国非正規労働者の実態分析』(金秀炫)、篠原收『男女共同参画社会を超えて: 男女平等・ダイバーシティ(多様性)が受容、尊重される社会の確立に向けて』(篠原収)、東京都産業労働局『東京都男女雇用平等参画状況調査結果報告書』(東京都産業労働局労働部労働環境課編)、東京都産業労働局『働く女性と労働法』(東京都労働経済局労政部労働組合課編)、吉浜美恵子・釜野さおり『女性の健康とドメスティック・バイオレンス: WHO国際調査/日本調査結果報告書』(吉浜美恵子, 釜野さおり編著: 秋山弘子[ほか著])、日本女子大学現代女性キャリア研究『私たちはどのようにセカンドチャンスをつかんだのか?: 女性の再挑戦30の事例: 女性のセカンドチャンス』(日本女子大学現代女性キャリア研究)、国際美術村・陣内一土『一土富士100: 自然は愛、しぜんはいのち』(陣内一土)、根岸愛子『およそ真なること: 平和への祈り』(根岸愛子)

〈中国書〉

中国性研究= *Sexuality research in China*. 2008 (1) (黄盈盈, 潘绥铭主编)

5) 来館・閲覧者

学生・研究生・大学院生 4名

大学院以上の研究者 4名

その他 2名